

ESSAY  
エッセイ

クラシックは面白い — その7

## 《魔笛》の主演は脇役

《魔笛》というオペラは、国籍不明の“旅する王子”のタミーノが夜の女王の支配地に紛れこみ、女王にくどかれ「悪漢ザラーストロに誘拐された私の娘パミーナ」を救出に向かう話として始まる。ところがザラーストロの城廊に着いてみれば、彼は聖者で、実は夜の女王が悪者という、ひどく荒っぽいドンデン返しがあった。

第2幕ではザラーストロの神殿でタミーノは“永遠の英知”を獲得するための修行に入る。最初は無言の行である。随行してきた3枚目のパパゲーノも一緒にやらされる。二人はまず地下室に放置される。タミーノはすなおに命令に従うが、パパゲーノにその気はない。「真の英知を戦い取る気があるか」と役僧に訊ねられれば「戦うのはご免だね。英知なんて要らねえ。飲んで食って寝てるのが一番」という始末。「これから死をも恐れぬ精神を作る修行に入る」と宣告されれば「そんなのまっぴら」という次第。そこで役僧はパパゲーノを餌で釣る。「無事に修行を終えれば可愛い女の子に会わせてやる。その名はパパゲーナ」と言われ、パパゲーノはその気になるが行いは改まず、しゃべり散らし挙句の果てに「水でも出しやがれ」と言うと、婆さんが現れて水を持ってくる。パパゲーノはしゃべりかける。「婆さん、齢はいくつだ」「18歳と2分だよ」「ワッハッハハハ…なに、18歳だって？ 80歳のまちがいだろ。好きな男はいるのか」「いるとも、私より10歳年上だ」「そうかい。その男の名前は？」「パパゲーノだよ」「え？」「あんたのことさ」と言われて驚いたパパゲーノを残して婆さんは消え去る。

次に現れた時、この婆さんは「あんた、まじめに修行しないから、このままじゃこの地下から出られないよ」と言う。「けれど、あんたが私に愛を誓えば、ここから出られるんだ」。そう言われてパパゲーノは残念ながらししぶしぶその婆さんを愛しますと言えば…あら不思議、老婆は18歳の美女パパゲーナの姿となる。アッと驚くパパゲーノの前から役僧たちはパパゲーナを連れ去る。

終景。消えた18歳のパパゲーナを探すも見つからず、絶望したパパゲーノは首でも吊ろうかということになる。だが、現れた3人の童子に教えられ、魔法のグロックンを叩けば、あら不思議、パパゲーナが現れた。驚きと喜びに声もつまったパパゲーノは女の名を呼ぼうとするが、声が出ない。「パ…… パ…… パ……」女のほうも声が出ない。「パ…… パ…… パ……」。二人の感動は次第にエスカレートし、しまいにはパパパパパパゲーナ（、）と呼び合う二人の声で舞台は一杯になる。得も言われぬほど崇高で美しく、おかしく、絶妙なシーンである。

この愛すべきパパゲーノがいなかったら《魔笛》というオペラは無味乾燥な修養劇に終わったことを思うと、彼を発明し演じた座長シカネーダの功績は勲一等等と言えよう。

執筆/石井 宏 (音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

サラマンカホール

子どものためのオペラ

モーツァルト作曲

「魔笛」

2016 12/18 (日) 開場13:30  
開演14:00

サラマンカホール

【自由席】

一般 2,000円 (サラマンカメイト1,800円)

高校生以下 500円

※3歳から入場できます。

※サラマンカメイト指定席は完売しました。

チケット料金

チケット  
発売中



《出演》

王子タミーノ：中井 亮一

王女パミーナ：國光 ともこ

鳥さしパパゲーノ：西元 佑

恋人パパゲーナ：五十君 綾子

夜の女王：松波 千津子

ザラーストロの家来モノスタトス：荒川 裕介

指揮：倉知 竜也

演出：池山 奈都子